

## 第2章 流動性と金融危機

石原秀彦

### 〈要旨〉

本論文では、流動性概念の整理を行い、流動性に関する代表的な経済理論を紹介するために、銀行の流動性供給と銀行取り付けを論じた Diamond and Dybvig (1983)とそれを拡張して金融市場の脆弱性を示した Allen and Gale (2004)、民間部門における流動性供給の可能性と限界を論じた Holmström and Tirole (1998)の議論を順次検討し、金融加速度理論についても若干の解説を行った。その中で特に重要な論点は以下の通りである。(1) Diamond and Dybvig (1983)における消費者の流動性需要と、Holmström and Tirole (1998)における企業の流動性需要は、ともに流動性ショックと呼ばれるリスクに対する保険への需要であり、より価値の安定した資産に対する需要として表される。(2) Diamond and Dybvig (1983)における銀行取り付けや Allen and Gale (2004)における資産価格の変動などの危機は、預金者の預金引き出し行動の変化、言いかえると、預金者の与信行動の変化によって生じ、それゆえ、中央銀行による信用供給＝「流動性供給」によって防止しうる。(3) Holmström and Tirole (1998)において、民間部門の供給する流動性資産の価値はマクロの流動性ショックにより大幅に下落する可能性があり、流動性枯渇の原因となりうる。(4) Holmström and Tirole (1998)も広い意味で含まれる金融加速度理論では、金融仲介の機能不全は情報の非対称性や契約の不完備性による企業や金融機関の信用制約によって生じ、それゆえ、信用制約の深刻化で生じた金融の機能不全を中央銀行が解決するためには、預金者や民間金融機関以上の審査・監督能力を発揮する必要がある。